『論考』の三つの言語

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚原, 典央 メールアドレス: 所属:
URL	https://fpu.repo.nii.ac.jp/records/62

［研究論文］

『論考』の三つの言語

塚　原　典　央

○はじめに

ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考（以下『論考』､TLP と略記する）』には三つの言語が出てくる。「日常言語」と「記号言語」そして「完全に分析された言語」の三つである。概略としては、日常言語を論理的に分析して行くと記号言語に至り、記号言語を分析して行くと完全に分析された言語へと至り着く、ということができるだろう。しかし細かく見るとかなり込み入っている。拙論ではこの三つの言語の関係の解明を試みる。

１：日常言語

はじめは日常言語についてである。ウィトゲンシュタインは『論考』において、日常言語をどのように考えていたのか。彼はまず日常言語の混乱について、次のように述べている。

TLP3.323：日常言語においては、同一の語が異なった仕方で表示を行う――つまり同じ語が異なったシンボルに属する――ということが大変多い。あるいは、異なった仕方で表示を行う二つの語が、外見上は同じ仕方で命題の中で用いられるということが大変多い。

たとえば、「･･･である、･･･がある（ist)」という語は、繫辞として、等号として、そして存在の表現として用いられる。「存在する」は「行く」のような自動詞として用いられ、「同一の」は形容詞として用いられ、そしてわれわれは何かあるもの（Etwas）について話し、また何かあること（etwas）が起こることについて話す。

（「緑は緑である」という命題――ここではじめの語は人名であり、後の語は形容詞である――において、これらの語は単に異なった意味（Bedeutung）を持つというだけではなく、異なったシンボルなのである。）[1)]

TLP3.324：かくして、最も基本的な混乱がいとも簡単に生じる。（哲学全体が、こうした混乱に満ちている。）

受付日　2015.11. 2
受理日　2015.12.18
所　属　学術教養センター

ここで「シンボル」とは有意味な記号のことであり、逆に記号とはシンボルの知覚可能な部分ということになる。「(田中）緑（さんの今日の洋服の色）は緑である」という日常言語の命題において、同じ「緑」という記号が人物である（田中）緑（さん）と、緑色の性質という異なる二つのもののシンボルを表すために用いられている。また異なる記号、例えば「チョモランマ」と「エベレスト」という二つの異なる記号は同じ山のシンボルを表している。同じ記号が異なるシンボルを表したり、異なる記号が同じシンボルを表したりといった紛らわしさが、日常言語にはよく見られる。そしてこの紛らわしさから、曖昧さが生じたり、混乱が生じたりする。われわれはこのようにして言語の論理を誤解してしまうのである。

ではこのような日常言語は、不正確で、間違った、正しくない言語なのか。この点についてウィトゲンシュタインは、次のように述べている。

TLP5.5563：われわれの日常言語の命題はすべて、実際、そのあるがままで論理的に完全に秩序づけられている。――われわれがここで提示しなければならないあの最も単純なものとは、真理の比喩ではなく、完全な真理そのものなのである。

（われわれの問題は抽象的なものではなく、そうではなく存在するものの中で最も具体的な問題である。）

日常言語はそのあるがままで、何ら論理的な不備や不完全さがあるわけではない。ウィトゲンシュタインはいわゆる「理想言語」を求めてはいない。理想言語を求める考え方とは、次のようなものである。「日常言語は論理的な視点からすれば、様々な訂正しようのない欠陥だらけの言語であり、誤謬に満ちた言語である。よってわれわれは思考を表現するために、誤解や曖昧さ、誤謬がけっして生じない、論理的に完全な「理想言語」を作り出さなくてはならない」とするものである。

ウィトゲンシュタインにとって日常言語には欠陥があるわけでもなく、誤謬があるわけでもない。日常言語はそのあるがままで論理的に完全に秩序づけられている。日常言語の命題をきちんと分析すれば、その論理的な構造は明確になるはずのものである。ただし、その論理構造は途方もなく複雑にできている。

TLP4.002：人間は、それぞれの語が何をどのように意味しているのかを全く知らなくても、あらゆる意味（Sinn）を表現できる言語を構成する能力を持っている。――ちょうど人間が、個々の音がどのように発せられるのかを知らなくても、しゃべることができるのと同じである。

日常言語は人間という有機体の一部であり、他の部分に劣らず複雑である。

日常言語から言語の論理を直接読み取ることは、人間には不可能である。

［日常］言語は思念を偽装する。すなわち衣装をまとった外形からは、まとわされた思念の形を推測できないように、偽装する。つまりその衣装の外形は、体の形を分からせるのとはまったく異なる目的で作られている。

日常言語を理解するための暗黙の取り決めは、極めて複雑である。

日常言語は論理的に何ら問題があるわけではないが、その構造は複雑さを極めている。そこでウィトゲンシュタインは言語の論理的構造を明確に捉えるために、「記号言語」を要請する。

2：記号言語

TLP3.325：こうした誤謬を避けるために、われわれはそれらを排除する記号言語を用いなければならない。その記号言語は、異なるシンボルに同じ記号が使用されたり、表示の仕方の異なる記号が同じ仕方で使用されているかのような見かけを持っていたりすることはない言語である。したがってそれは論理的文法――論理的構文法――に則っている記号言語に他ならない。

（フレーゲとラッセルの概念記法はそのような言語の一つであるが、すべての誤りを排除しているわけではない。）

この記号言語においては、日常言語にあった混乱はない。つまり同じ記号が複数のシンボルを表すために用いられたり、複数の記号が同じシンボルを表すために用いられるといったことはない。言い換えれば、記号言語の論理的構文法はシンプルなものであって、言語の論理が誤解されることのない表現になっている。しかしこの記号言語は日常言語以上に論理的に完全である、というわけではない。単に両義的であったり曖昧であったりすることのない、誤解や混乱の起きない言語である。問題は「論理的構文法」にあるが、その前に三つ目の言語を見ておきたい。

3：完全に分析された命題

この記号言語はさらに分析することができる。

TLP3.2：思念は命題で表現される。その際思念を構成する諸対象に命題記号の諸要素が対応する。

TLP3.201：この要素を私は「単純記号」と呼ぶ。そしてこのような命題を「完全に分析さ

れている」と言う。

TLP3.202：命題において用いられた単純記号は、名と呼ばれる。

TLP3.21：命題記号における単純記号の配列は、状況における対象の配列に対応する。

TLP3.22：名は命題において対象の代理をする。

命題は最終的には、「単純記号」と呼ばれ、さらに「名」と呼ばれるものの配列にまで分析される。そしてこの名の配列が、世界における対象の配列に対応している。さらに、一つの名と一つの対象とが一対一対応することによって、あるいは一つの名が一つの対象の代理をすることによって、命題は始めて世界における事実の像となる。この名の配列となり、完全に分析された命題に至らなくては、そもそも命題は世界の像になり得ないのである。

そしてこの完全に分析された命題は「要素命題」と呼ばれる。

TLP4.21：最も単純な命題、すなわち要素命題は、一つの事態の成立を主張する。

TLP4.22：要素命題は名から成り立つ。要素命題はいくつかの名の繋がり・連鎖である。

TLP4.221［部分］：命題を分析して行けば、名が直接結合している要素命題に行き着かなければならないことは、明らかである。

4：論理的構文法

では問題の「論理的構文法」に移ろう。『論考』においては、次のように述べられている。

TLP3.33：論理的構文法においては記号の意味（Bedeutung）はいかなる役割も果たしてはならない。論理的構文法は、記号の意味（Bedeutung）に言及することなく、築かれなければならず、そこではただ表現の記述のみが前提となり得る。

この節に従えば、論理的構文法においては記号の意味・指示対象については何ら問題にされていない。むしろ逆に、記号の意味・指示対象については関わってはならないと主張している。この論理的構文法は言語のみに関わるもの、言語内部の規則であって、世界とは関係のないもの、あるいは世界の構造としての論理とは別個なものということになる。

また1929年の「論理形式について」においてウィトゲンシュタインは「構文法」について次のように規定している。「構文法という語の一般的な意味で私が言おうとしていることは、語が意味を与えるのはそれが如何に結合された場合でだけであるのかを述べ、このことによって無意味な構造を排除するような規則のことである。[2)]」ここでの「構文論」は『論考』の「論理的構文論」と同等だと考えられる。語を有意味に結合するための規則が、言い換えれば語を

結合して有意味な命題を構成するための規則が論理的構文法ということになる。そして、論理的構文法がいくつかの語が有意味に結合される可能性を規定する規則ということになる。

しかしこの論理的構文論は、名が有意味に結合する可能性を規定する規則と言えるだろうか。『論考』の言語観の根幹の一つである命題の像理論の基礎は、「対象と名が一対一対応すること」にある。要素命題は、自身を構成するいくつかの名が各々対象と一対一対応することによって、世界の像となっている。したがって、有意味な名の配列の可能性は、成立可能な対象の配列の可能性と対応しているはずである。言い換えれば、要素命題の可能性は対応する事態の可能性に依存している。さらに言い換えれば、要素命題の可能性は、事態の有する論理によって規定されている。論理は第一義的には「世界の論理」であって、言語の論理ではない。論理は命題が世界の像となることによって、はじめて言語が世界と共有するもの、世界から言語へと移入されるものに他ならない。

もしそうであるならば、論理的構文法は名の意味・指示対象と無関係ではあり得ない。むしろ、いくつかの対象の結合の可能性、つまりそれらの対象によって成立しうる事態の可能性こそが論理的構文法であるはずなのである。

そうではなく、実は『論考』において「要素命題」は二つの意味で用いられているのである。この点を見る前に、命題の像理論と共に『論考』のもう一つの根幹をなす、存在論ではなく成立論としての「論理的原子論」を見ておきたい。

5：事態と要素命題

『論考』においては、言語は諸命題の総体であり、命題は諸要素命題からなり、要素命題は諸名からなる。しかし、なぜ「命題が諸名からなる」ではいけないのか。同様に世界の側も『論考』では、世界は諸事実の総体であり、事実は諸事態からなり、事態は諸対象からなる。しかし、なぜ「事実は諸対象からなる」ではいけないのか。どうして世界の「事態」とそれに対応する言語の「要素命題」が必要なのか。何故「事実」と「対象」、「命題」と「名」だけではだめなのか。

その理由の一つは、『論考』の「世界の成立論」にある。

TLP1：世界は成立していることがらの総体である。

TLP1.1：世界は事実の総体であり、ものの総体ではない。

世界は存在する「もの」つまり「対象」の総体ではなく、「成立していることがら」つまり「事実」の総体に他ならない。そして成立していることがらの最小単位が「事態」だとされる。したがって、成立している世界は事態の総体として規定される。存在する対象の総体が世界なの

ではない。

TLP2.04：成立している事態の総体が世界である。

対象は確かに世界の実体を形づくっている（TLP2.021）が、単独で存在しているものではない。必ず他の対象との関係を持って存在している。言い換えれば、各対象がばらばらに存在していたのでは、対象間の関係が与えられない。すべての対象は、自身と他の対象との関係の可能性を最初から内に持っている。そして、その可能性の一つは必ず成立している。つまり、対象は必ず何らかの事態の構成要素になっており、何らかの事態の構成要素としてのみ存在している。それ故、ある対象を知るということは、その対象が事態のうちに現れうるすべての可能性をもまた知ることになる（TLP2.0123）。そしてこの、ある対象が事態のうちに現れる可能性が、その対象の形式である（TLP2.0141）。この「対象の形式」こそが世界の論理の本体に他ならない。

同様のことが像にも言える。像の基本構造は、対象と像の要素との一対一対応である。しかし像の要素はそれ自体単独で、対象と対応しているのではない。それは、像の要素単独では像になり得ないからである。あくまでも、「像において」像の要素は対象に対応している（TLP 2.13）。あくまでも、「像において」像の要素は対象の代理をする（TLP2.131）。

さらに同様のことが、心的像である「思念」についても、さらにその思念の知覚可能な表現である「命題」についても言える。完全に分析された命題は、いくつかの名の配列によってできている要素命題である。しかしまたあくまでも、「（要素）命題において」用いられた単純記号が名と呼ばれる（TLP3.202）。そしてあくまでも、「（要素）命題において」名は対象の代理をする（TLP3.22）。命題において用いられていない記号は、対象の代理をする名ではない。

TLP3.141［部分］：命題は語の寄せ集めではない。――（音楽の主題が音の寄せ集めではないように。）

TLP3.142：事実だけが意味（Sinn）を表現できる。名の集まりにはそれができない。

TLP4.23：名は、要素命題という文脈においてのみ、命題に現れる。

このように世界に存在するものとしての最小単位は対象であるが、世界において関係性を持ち論理性を有する構成要素の最小単位は事態なのである。同様に、言語の構成要素の最小単位は名であるが、言語の有意味性を持つものの最小単位は要素命題に他ならない[3)]。

6：真理可能性としての要素命題

論理的構文法の問題に戻ろう。仮に論理的構文法を名の配列としての要素命題を支配している規則だと考えると、確かに齟齬を来してしまう。名が「意味（Bedeutung）を与えるのはそれが如何に結合された場合だけであるか」を述べるのは、まさにその名の意味（Bedeutung）である対象の持つ形式、つまり論理だからである。しかし、

TLP3.24［部分］：複合的なシンボルを一つの単純なシンボルにまとめるとき、それは定義によって表せばよい。

TLP3.261［部分］定義によって導入された記号はすべてその定義に用いられている記号を通して複合的なものを表す。

複合されているものを定義を用いて、一つのシンボルにまとめることができる。要素命題はいくつかの名の配列であるが、定義によって一つのシンボルにまとめることができる。

TLP4.27：n 個の事態の成立・不成立に関して $K_n=\sum_{\nu=0}^{n}\binom{n}{\nu}$ 通りの可能性がある。どの事態の組合せも成立しうるが、ある組合せが成立しているときは、その他の組合せは成り立っていない。

TLP4.28：これらの組合せに対応して、要素命題の真――および偽――の可能性が同じ数だけある。

TLP4.3：要素命題の真理可能性は、事態の成立・不成立の可能性を意味している。

いくつかの対象によって成立しうる事態は、論理によってその可能性が決定されている。現実にはその一つが成立していて、その他の可能な事態は不成立である。そして要素命題は、事態の対象と名を一対一対応させることによって、可能な事態の内のこの一つの事態が成立していると主張している。言い換えれば、その一つの事態を意味している。そしてその要素命題が真であるということは、その要素命題が意味している事態が成立しているということであり、偽であるということは、意味している事態が不成立だということになる。そして、

TLP4.31：真理可能性は次のような図表で表すことができる。（要素命題が並んだ行の下の「真」と「偽」の各行は、諸要素命題の真理可能性を見やすい仕方で表したものである。）

p	q	r
真	真	真
偽	真	真
真	偽	真
真	真	偽
偽	偽	真
偽	真	偽
真	偽	偽
偽	偽	偽

p	q
真	真
偽	真
真	偽
偽	偽

p
真
偽

TLP4.4：命題は、諸要素命題の真理可能性との一致・不一致の表現である。

TLP4.41：諸要素命題の真理可能性が、命題の真・偽の条件である。

命題は、それを構成している諸要素命題の真理可能性、つまり真・偽の組合せと一致するか不一致であるかによって、その真偽が決まる。言い換えれば、命題の真偽は、それを構成する諸要素命題の真偽によって決まる、ということになる。ここで要素命題に求められていることは真偽の可能性のみであって、対象と一対一対応している名の配列ではない。つまり、要素命題は真理可能性を表す一つの記号によって表されている。先の『論考』4.31節では、「ｐ」「ｑ」「ｒ」が要素命題を表している。そしてここではこれらの記号の意味・指示対象はまったく問題になっていない。

TLP5：命題は諸要素命題の真理関数である。

（要素命題は自分自身の真理関数である。）

TLP5.01：諸要素命題は、命題の真理変項である。

命題の真偽が、それを構成する諸要素命題の真偽に依存しているということは、命題は諸要素命題の真理関数だということになる。このことを逆に要素命題の側から見れば、諸要素命題はそれらの真理関数である命題の項であり、さらに、真あるいは偽のみが問題となる真理変項である。

7：論理定項

そしてここで「命題」と呼ばれているものは、記号言語に属している。このような記号言語についての規則が、論理的構文法と言われているのではないか。記号言語の命題を構成するものは、「論理定項」と「真理変項」の二種類のものだけである。

TLP4.0312：命題の可能性は、記号による対象の代理という原則に基づいている。

「論理定項」は何らかの対象の代理ではない。事実の論理が何かによって代理されるということはない。これが私の根本思想である。

「論理定項」とは、記号言語で用いられる「¬」「∧」「∨」「⊃」といった記号に他ならない。ただし世界には、これらの記号に対応する対象は存在しない。よってこれらの記号は意味・指示対象を持たない。また「真理変項」は真あるいは偽を指し示しているが、世界の中に「真」や「偽」といった対象は存在しない。これらは言語の中にのみある。これらの記号を支配しているのが論理的構文法なのである。

像が世界の像であるための第一義的原理は、像の要素と世界の対象との一対一対応である。それに加えて像の種類によって、それぞれの表現の仕方がある。例えば楽曲の像としての楽譜である。楽曲そのものは、ピアノ曲ならばピアノの音によって構成されるが、その像である楽譜は、五線と音譜を用いて「五線記譜法」という規則に従って表現される。もちろん楽曲そのものには五線といったものも音譜といったものも存在しない。この楽譜の五線記譜法に当たるものが、記号言語における論理的構文法に他ならない。論理的構文法は記号言語のみを支配する規則であって、完全に分析された言語を支配するものではない。

○おわりに

では実際に日常言語の命題を分析していくと、名の配列である要素命題に至るのだろうか。ウィトゲンシュタイン自身『論考』4.002節で「日常言語から言語の論理を直接読み取ることは、人間には不可能である」と述べているように、日常言語の命題を直接分析することは事実上できない。さらに、名が対応しているはずの「対象」が如何なるものであるのか、『論考』においてはその例も示されていない。そしてウィトゲンシュタインが1949年の夏から秋にかけてアメリカのイサカにN.マルカムを訪ねた時の会話として、次のものが残っている。

私［マルカム］はウィトゲンシュタインに、『論考』を執筆していたときに、「単純な対象」の具体例を何かはっきりと考えていたのかどうか、と尋ねてみた。彼の答えは、当時自分は論理学者だと考えていた。そしてあれやこれやの事物が単一であるか、あるいは複合体

であるのかを決定することは、論理学者である自分の仕事ではなく、経験上の事柄だと考えていた、というものであった。明らかに、彼は自分の以前の見解を、不合理なものと看做していた。[4)]

これがウィトゲンシュタインの率直な言葉だとすれば、彼自身対象として具体的に何かが念頭にあって、『論考』を執筆したわけではないことになる。

ではどう考えればよいのか。一つの仮説としては、次のように考えることができるかもしれない。フレーゲ、ラッセルと共に現代論理学をまとめ上げたウィトゲンシュタインは、命題は事実の像だというアイデアを基に「原子論的成立論」という形而上学を構築し、それに現代論理学を接ぎ木したのではないか。つまり、完全に分析された言語として要素命題を名の配列と捉える原子論的成立論の領域と、命題を諸要素命題の真理関数と捉える記号言語の領域とを接ぎ木したことになる。

しかし、論理的構文法は記号言語を支配する規則ではあるが、世界の有する論理とは無関係なものとならないか。論理的構文法とは言語が世界と論理を共有するために、言語の側が守らなければならない規則、あるいは言語の側の制約であり、世界の論理に直接関わるものではない。次の問題は、この論理的構文法という規則なり制約の上に立って、言語はどのように世界の像であることを保持していけるのだろうか、あるいは言語は世界と論理をどのように共有しうるのだろうか、ということになる。

○文献表（邦訳のあるものは参照させていただきました。ありがとうございました。）

L. Wittgenstein

・*Notebooks 1914−1916*(2nd ed.), G.H. von Wright & G.E.M. Anscombe eds., The University of Chicago Press, 1979. 邦訳：『草稿一九一四～一九一六』、奥雅博訳、ウィトゲンシュタイン全集１、大修館書店、1975。

・『論理哲学論考』（『論考』、TLP）：*Tractatus Logico−Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul,1922. 邦訳：『論理哲学論考』、坂井秀寿訳、法政大学出版局、1968年；『論理哲学論考』、奥雅博訳、ウィトゲンシュタイン全集１、大修館書店、1975年；黒崎宏訳・解説、『『論考』『青色本』読解』、産業図書、2001年；野矢茂樹訳、『論理哲学論考』、岩波書店、2003年；丘沢静也訳、『論理哲学論考』、光文社、2014年。

・“Some Remarks on Logical Form”, in I.M. Copi & R.W. Beard (eds.), *Essays on Wittgenstein's Tractatus,* Routledge & Kegan Paul, 1966. 邦訳：奥雅博訳、「論理形式について」、奥雅博訳、ウィトゲンシュタイン全集１、大修館書店、1975年、所収。

その他

・N. Malcolm, *Ludwig Wittgenstein : A Memoir,* Oxford U.P., 1958. 邦訳：N. マルコム他、藤本隆志訳、『回想のヴィトゲンシュタイン』、法政大学出版局、1974年；ノーマン・マルコム、板坂元訳、『ウィトゲンシュタイン――天才哲学者の思い出――』、講談社、1974年。

○注

1）「Sinn」と「Bedeutung」の区別については、少し注意が必要になる。「Sinn」は命題の意味であり、「Bedeutung」の方は名の意味である。そして命題が意味するものは事実であり、名が意味するものは対象に他ならない。ただ名の意味といっても、「対象については、私は名をつけることができるだけである（TLP3.221）」とあるように、名は自身と一対一対応している対象を指し示す事ができるだけで、それ以上のことは名にはできない。したがって、記号（名）が指示している対象という意味で、「Bedeutung」を「指示対象」と訳すことも可能である。

2）“Some Remarks on Logical Form”, p.31.

3）この『論考』の形而上学が対象の存在論ではなく、事態の成立論であるということについては、さらなる論証が必要であるが、この点は稿を改めることにしたい。

4）N. Malcolm, *Ludwig Wittgenstein : A Memoir,* p.86.

同様に、ウィトゲンシュタインは論理学者として『論考』を執筆したのであって、経験上の問題、あるいは科学上の問題については関心を持たなかったことを示す例がもう一つある。それはラッセルとの手紙の中にある、「思念」についてのやり取りである。

［ラッセルの問い］「･･･しかし思念は一つの事実である。では、何が思念の構成要素であり、何が思念の成分なのか。そして写像される事実の構成要素や成分に対するそれら［思念の構成要素や成分］の関係はどのようなものか。」［ウィトゲンシュタインの回答］思念の構成要素が何であるのか、私には分かりません。しかし私は、思念は言語における語に対応する構成要素を持たなければならない、<u>ということ</u>は分かっています。また、思念の構成要素と写像される事実の構成要素とがどのような種類の関係にあるのかは、重要ではありません。それを見出すのは心理学の問題でしょう。

［――中略――］

［ラッセルの問い］「思念は語からなるのか。」［ウィトゲンシュタインの回答］いいえ。現実に対して語が持っているのと同じ関係を持っている心的構成要素からなるのです。この心的構成要素が何であるのか、私には分かりません。

Notebooks 1914.1916, pp.130–1. なお、［　］内は塚原が挿入した。下線部はウィトゲンシュタイン自身による強調。